

(1ページから)

につくられ、地域にほとん
ど基盤がなかった。協議の
末に「平井支部」として合
併し、瀧口は、副支部長に
就任した。支部結成後は、
精力的に支部員の拡大を
めざすが、地域には、越えな
ければならない大きな壁が
あった。それは、融和的な
意識もあつたが、もつと根
深い問題であつた。

戦前、平井地区では水平
運動が盛んにおこなわれ
ていたが、「寺院の開放問
題」が原因で地域を二分す
る対立にまで及び、地域の
2ヶ寺から半数以上の檀家
が脱退し、あらたに「水平
社の寺」の建立という事態
に至つた。そのことがトラ
ウマになり『部落解放運動
が、また対立の再燃に』と
いう意識が強かつたのであ
る。それでも瀧口らは地域
の意識を変えるために粘り
強くとりくみをすすめた。

(3)

1972年頃から、県連
の運動をめぐり動きは「答
申・特措法」の評価、「狭山」
闘争、「橋のない川」上映、
参議院議員選挙さらに馬頭
県議差別事件などのとりく
みをめぐって、大きく揺れ
動いていた。

こうしたなか、平井支部
は杭ノ瀬支部らとともに県
連の再生に向けすもうと
していたが、旧楠見支部メ
ンバーは反対し、中立を主
張した。そこで支部大会を
ひらき、平井支部は旧楠見
支部の反対のなか、瀧口を
支部長に選出し「県連の再
建再生」に向け行動するこ
とを決定した。

そして、1974年8月
(白浜)に、県連執行部の
県連大会の強行を阻止する
ために、県内の仲間ととも
に、瀧口を先頭に平井から
も多数の支部員が白浜に結
集した。結果、警察の介入
などの問題もあつたが、大
会のデッチ上げを阻止し、

2ヶ月後の10月に「第19回
県連再建大会」を成功させ
た。この時、瀧口は県連執
行委員に選出された。

(4)

さて、再建を果たした県
連には、課題が山積してい
た。①未組織部落の組織化、
②「狭山」再審闘争、「特
措法」完全実施、「部落地
名総鑑」糾弾の三大闘争の
強化であつた。瀧口は県連
組織部長として、そうした
課題に先頭に立つてとりく
み、とくに1978年以降
「県内網の目行動」を実施、
未組織部落や「正常化連」
の拠点部落も含め、全部落
で行動をおこない、同時に
市町村行政への交渉や要請
行動をすすめてきた。

また、この間も「向陽高
校(75年)」「和医大(76年)」「
野崎小学校校長(77年)」
と相次いで差別事件が提起
され、糾弾闘争が展開され
た。とくに、「野崎小学校
校長差別事件」の第1回糾
弾会が平井で開催され、先
頭に立つて校長の意識と背
景を追及していった。

(5)

地域では、支部にたいし
て、まだまだ『減税や融資
目当ての商売人の集まり』
という見方が強かつた。そ
うした状況のなかで、①支
部組織の強化、②「同和对
策事業・長期計画」の見直
しを柱に活動を強めた。「実
態調査」を実施して、住民
の要求からかけ離れた「長
計」の問題を明らかにし、

住宅困窮者自身の組織「住
宅要求者組合」を結成して、
要求者自身の行動で要求の
実現をめざした。教育・生
活など要求などの課題も同
様にすすめていった。

(6)

また「狭山闘争」を強
力に展開するということ
で、地域内でのピラミキヤ
学習会を開催してきたが、
1976年と1980年の
2度にわたって「狭山同盟
休校」を決定した。この2
度の同盟休校に参加した子
どもたちが支部青年部に、
そして現在の平井支部を担
う人材に育ってきている。
また、狭山闘争はその後、
青年たちに継承され毎月23
日の和歌山市駅での街頭ビ
ラ活動として現在に至つて
いる。

また1980年に起きた
「市立和歌山商業高校差別
事件」で教職員組合の妨害
のなか、全教職員が参加し
て「糾弾会」が開催され、
教職員の姿勢、同和教育の
内容を中心に追求し、とも
に学習をすすめてきたこと
だ。そうしたとりくみもだ
が、最も瀧口らしく、今で
も鮮明に覚えているのが、
1995年1月17日に起き
た「阪神淡路大震災」への
支援活動だ。発生した夜、
瀧口の強引ともいえる判断
で、神戸に救援に行くこと
を決定。会館や保育所の協
力も得て、支部員や住民が
一体になりカンパ集め、医
療品の確保、飲水や食料を
2万人分準備し、3日目の
早朝、神戸市長田区で救援
活動を実施したことだ。

瀧口は、さまざまなアイ
デアを提案した。1975
年に支部と子ども会の主催
で自治会も協賛して「平
井地区夏祭り」を開催し、
1989年に「子どもの人
権展」を「アパルトヘイト」
をテーマに開催、その後も
「障がい者」「アイヌ民族」
「昔の遊びと生活」をテー
マに開催している。さらに、
1988年に「平井地区街
づくりプロジェクト会議」
を結成、実態調査、現地学
習を基礎に、行政との協働
でさまざまな課題へのとり
くみをすすめてきている。

(7)

瀧口は、1980年の
はじめの頃に、部落解放同盟
の日中友好訪中団の一員と
して中国に渡っているが、

また国交正常化直後のこと
で、『友好より学習漬けの
毎日だった』とメモ書きで
いっばいになったノート
青年たちに見せ、『解放理
論の学習が大事だ』と青年
たちにいっばいづけた。

今また私たちは、和歌山
の部落解放運動の再生と発
展を知るかけがえのない人
を失った。しかし今は、瀧
口秀光顧問の闘いの道程を
再認識し、闘いの道半ばで
倒れられた多くの先人先輩
たちの思いをしつかりと継
承して、完全解放の「よき
日」に向けさらにまい進す
ることを誓い合いたい。

また1980年に起きた
「市立和歌山商業高校差別
事件」で教職員組合の妨害
のなか、全教職員が参加し
て「糾弾会」が開催され、
教職員の姿勢、同和教育の
内容を中心に追求し、とも
に学習をすすめてきたこと
だ。そうしたとりくみもだ
が、最も瀧口らしく、今で
も鮮明に覚えているのが、
1995年1月17日に起き
た「阪神淡路大震災」への
支援活動だ。発生した夜、
瀧口の強引ともいえる判断
で、神戸に救援に行くこと
を決定。会館や保育所の協
力も得て、支部員や住民が
一体になりカンパ集め、医
療品の確保、飲水や食料を
2万人分準備し、3日目の
早朝、神戸市長田区で救援
活動を実施したことだ。

また国交正常化直後のこと
で、『友好より学習漬けの
毎日だった』とメモ書きで
いっばいになったノートを
青年たちに見せ、『解放理
論の学習が大事だ』と青年
たちにいっばいづけた。
県水平社90周年の記念誌
の編纂に関わり功労者の間
き取りのなかで『具体的
ことや運動のことを知らない
ことや運動のことを知らない
かつたが、藤本正明さんと
会ってから知ったと思う』
と語っていた。『それまで、
色んな怒りや憤りがあつた
が、生きる』と精一だった』
ともべている。瀧口顧問
にとつては、藤本や中澤と
の出会いが、その後の人生
を決定づけたのだった。晩
年、その盟友たちが次々と
先立つたことに落胆は激し
く、自身も体調を崩すよう
になっていた。

一節に『人の世の冷たさが、
どんなに冷たいか、人間を
いたわる事が何であるかを
よく知っている吾々は、心
から人生の熱と光を願求礼
讃する』とあるが、まさに
瀧口顧問の人生の源泉であ
り、生き様だった。

合掌

支局からの お知らせ



お気軽にお電話を!

和歌山支局では、各支
部でのとりくみを積極
的に紹介していきたく
と思います。支部活動や
子ども会活動など、支局
までお知らせいただけ
れば、取材に走ります。
もちろん、投稿記事も大
歓迎! 写真を添えて
支局までお送り下さい。
(発送先) 〒640-8314
和歌山市神前405-3
部落解放同盟県連会内
解放新聞和歌山支局宛

今後の日程 (変更もあります)

(5月)

- 7 萬民平等差別戒名法会 (高野山大伽藍金堂)
- 女性部三役会議 (プラザホープ)
- 第4回執行委員会・拡大県委員会 (プラザホープ)
- 第9回青年運動部会議 (同和企业センター)
- 14 第78回全国大会 (京都)
- 15 第6回女性運動部会議 (同和企业センター)
- 23 第41回第42回合同青年部定期大会 (同和企业センター)
- 28 和歌山人権研究所第8回会員総会 (プラザホープ)
- 新宮支部定期大会